

メイヤロフケア論への道一

高橋 隆雄

はじめに

ミルトン・メイヤロフ(1925-1979)のケア論 (*On Caring*, Harper Perennial, 1971) は、日本ではケアについて論じる際の必読文献となっている。彼の略歴は邦訳『ケアの本質－生きることの意味－』(田村真・向野宣之訳、ゆみる出版、第7版 1998 年)の解題によると、次のようである。(この情報は私の所有する原著の版には記載されていない。)

ニューヨーク州コートランドの州立大学(SUNY Cortland)の哲学の教授。(ただし、「訳者あとがき」の日付 1987 年 3 月には、すでに彼は亡くなっている。) 1925 年にニューヨーク市に生まれ、ニューヨーク大学で B.S.とM.A.の学位を得、コロンビア大学で Ph.D.の学位を得ている。また、ブルックリン・カレッジやヒューストン大学でも教鞭をとっている。

なお、別の資料によれば、彼が Ph.D.の学位を取得したのは 1961 年であり、論文のタイトルは、“John Dewey’s Concept of the Unification of the Self: An Exposition and Critique”である。

以上が、私がメイヤロフに関してもっている情報であった。

ケアということに関心をもつ研究者の一人として、私はメイヤロフがケアの理論に至った過程について知りたいと思ってきた。というのは、現在ではケア概念そのものを論じることに違和感がないのであるが、1960 年代では異例のことだったからである。たとえば、アメリカの看護界でも、当時は具体的なケアの在り方は論じられても、ケアやケアリングの議論はその後に登場している。看護の領域での議論にメイヤロフが影響を受けたのではなく、むしろ逆に、メイヤロフのケアの理論に看護界が影響を受けたといえる。そのようなわけで、メイヤロフがケアの概念を着想した経緯への関心が私にあった。ところが、私が知るかぎりでは、日本語の文献でそれについて論じたものはないし、外国語文献でも見つけることができなかった。

このようなことに拘泥するのには理由がある。それは、ひとつには、概念の由来、素性、背景を知ることが、その概念の理解にとって不可欠と考えられるからである。そして、それと関連することであるが、現在大きな注目を浴びているケアという概念が生まれてきた過程を探究することで、ケア概念のもつ可能性についても再考できると思えるからである。

メイヤロフはニューヨーク州立大学サニーコートランド校で教鞭をとっていた。ここは教育学系の大学で、ニューヨーク州北部のカナダに近いところにある。この大学のホ

ホームページを訪れてみると、大学への質問コーナーがあった。ふつうは受験生が活用して大学のカリキュラムや入試について質問するコーナーである。私のような者はふさわしくないと考えたが、ダメもとで質問を書いてみた。内容は、まず私がメイヤロフのケアの理論に関心をもつ日本の研究者であること、そして、メイヤロフがケアという概念に至った経過と理由を知りたいというものだった。

予期せぬことだったが、コーナーの担当者は、ただちに私の質問を何名かの現職教員や元教員にコピーアンドペーストで送ってくれた。その結果、数名の研究者からメールをもらうことができた。しかし、残念ながら、メイヤロフがケアという概念に至った経過についてはわからないというものばかりだった。

それでも、メイヤロフの元同僚だったロバート・シュエイガー氏からのメールによって、彼の日常と人となり、そして *On Caring* の出版について、いくつか興味深いことを知ることができた。

それによれば、その元同僚とメイヤロフはともに、1963年にニューヨーク州立大学サニーコートランド校に着任した。それは、哲学科の改組による増員（2名から4名）のためであった。二人は1979年冬のメイヤロフの死まで同僚としてあった。その元同僚は学科主任を長く務め、その取り計らいにより、メイヤロフは比較的自由に研究できる環境を与えられていたようである。また、面白いことに、彼は研究室で仕事をするとはほとんどなく、お気に入りだった街のカフェテリアスタイルのレストランに行き、一杯のコーヒーとケーキを注文して、本を読んだり仕事をしたりしていた。それは、彼の研究対象の一人だったフランスの実存主義者のスタイルに倣っているようだった。その習慣は彼のお気に入りだったようで、ある事情で街のカフェが閉店すると、しばしば20マイル離れたイサカの街のメインストリートにあるカフェテリアまで車で行ったくらいだった。

彼が著作 *On Caring* を刊行したのは1971年で、40代半ばの頃であった。元同僚によれば、それまで彼は学会だけでなく学内でもあまり知られていない存在だった。刊行されたのは小冊子ではあるが、*World Perspective Series* の一冊として出版された。このシリーズは、エーリッヒ・フロム、ポール・ティリッヒ、ジャック・マリタン、鈴木大拙などの有名人の寄稿で知られていた。メイヤロフの直前の巻の著者は、著名な物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルクであった。メイヤロフは概念や文章の彫琢に時間を費やすタイプだったらしく、数年前にも出版可能だったものを練りに練って出したのがその冊子だったと、シュエイガー氏はいう。実際、同名の論文が1965年に公表されている。大学出版会からの刊行とは異なり、世界的に知られるシリーズの一冊として世に出たため、メイヤロフは一躍有名になり、出版後は、それに関するシンポジウムが全米にわたって幾度も開催された。しかし、8年後の1979年、メイヤロフ夫妻は交通事故で亡くなった。

元同僚は、ひょっとすると最初の子どもの生まれたことがケア概念の着想に関係した

かもしれないと述べている。71 年の著作では子供をケアする父親の例が随所に登場するので、そうしたことが関係したかもしれない。しかし、関係しなかったかもしれない。また、それならば、大学教師としての経験がケア概念を思いつかせたかもしれないといえる。教師と学生の関係も頻繁に言及されるからである。

メイヤロフがケア概念に至る経緯については、やはり、文献という確かな手がかりを検討するのがよいだろう。

1. フロムの愛の概念

メイヤロフは前掲の『ケアの本質－生きることの意味－』の「1.序」で、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」(邦訳 p.13,原著 p.1)と述べる。彼にとってケアの対象は人間にかぎらない。それゆえ、メイヤロフに従えば、ケアとは対象の成長を助けることと定義できるだろう。

このようなケア概念を尋ねて、私はまず、メイヤロフが大きく負っていると認める思想家のうちの一人であるエーリヒ・フロムの著作を検討してみた。すると、『愛すること』(鈴木晶訳、紀伊國屋書店 1991 年。原著 *The Art of Loving*, Harper & Row, Inc. 1956. 本稿で使用したのは Perennial Modern Classics 版, 2006)の中に、メイヤロフのケアの説とよく似た表現を見つけた。その部分を引用してみる。なお、下記で原語の付加は本稿の筆者による。

愛に配慮(care)が含まれていることをいちばんはっきりと示しているのは、子どもにたいする母の愛である。もし、ある母親に子どもにたいする配慮(care for)が欠けているのを見てしまったとしたら、つまり子どもに食べ物をあげたり、風呂に入れたり、快適な環境をあたえることを怠っているのを見てしまったら、たとえその母親が自分は子どもを愛していると言ったとしても、その言葉を信じることはできないだろう。反対に、母親が子どものことをあれこれ気づかっている(caring for)のを見れば、その愛に打たれるだろう。動物や花にたいする愛情の場合にも同じことがあてはまる。もしある女性が花を好きだといっても、彼女が花に水をやることを忘れるのを見てしまったら、私たちは花にたいする彼女の「愛」を信じることはできないだろう。愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかける(active concern)ことである。この積極的な配慮(active concern)のないところに愛はない。(邦訳 pp.48-49, 原著 pp.24-25)

引用中の傍点部分は、ケアとは対象の成長を助けることというメイヤロフのケアの定義とよく似ている。そして、上の引用箇所では、ケアは愛に含まれるとされている。おそらく、メイヤロフがケアを対象の成長を助けることと規定するとき、フロムの愛の定義が彼の念頭にあったことは間違いないだろう。つまり、メイヤロフは、フロムの愛の定義を念頭に置きつつ、愛と深く関係するケアでもって愛を置きかえることによってケ

アを定義したのである。

そうであれば、本稿の冒頭に記した私の問い、すなわち、メイヤロフがケアという概念に至った経過は、以上によって答えられたといえるだろうか。

フロムは、愛にはケアとともに責任、尊敬、知が含まれるという（邦訳 p.48, 原著 p.24）。このことはメイヤロフにも受け継がれており、それに関する記述は『ケアの本質』の随所に散りばめられている。また、愛においては、二人が一人になり、しかも二人であり続けるというパラドックスが生じるとフロムは述べる（邦訳 p.41, 原著 p.19）。このパラドックスもメイヤロフが踏襲するところである。さらに、「一人の人をほんとうに愛するとは、すべての人を愛することであり、世界を愛し、生命を愛することである」（邦訳 p.77, 原著 p.43）という愛の包括性の主張も、メイヤロフでは次のように言い換えられている。「私のするケアが十分包括的なものであるならば、このケアは私の生活のあらゆる領域に深くかかわってきて、実りある秩序を提示する。」（『ケアの本質』邦訳 p.112 原著 p.66）

このように、フロムが「愛」について述べたこととメイヤロフが「ケア」について述べたことは、たんなる見かけの類似を超えている。しかし、それでも、当初の問いはまだ答えられていないと思われる。というのは、フロムの「愛」とメイヤロフの「ケア」が類似しているとしても、それだけでは、なぜ「愛」ではなく「ケア」を主題にしたのか明確でないからである。上述のように、フロムでは、ケアは愛に含まれる。そして、ケアとは母親が子どもに対して行う食事や入浴の世話のような具体的な行為のことである。ケアが個々の場での個別的な行為にかぎられているとすれば、そこには愛がもちうる包括性はないといえる。

メイヤロフがケア概念に至った経過を尋ねる当初の問いに答えるためには、ケアが具体的・個別的な行為の次元だけでなく、人間の生一般にかかわっているような捉え方が必要である。そこで、次には、メイヤロフの論文や単著を考察することで、答えに迫ることにする。まずは、65年に公開された論文と、その論文と同じタイトルであり彼の主著である71年の著作について見てみよう。

2. ケアの現象学とケアの存在論

（1）65年の論文“On Caring”ーケアの現象学

メイヤロフは71年の著作“On Caring”刊行に先立つこと6年前に、同名の論文を雑誌 *International Philosophical Quarterly*, vol.5, Issue3, September 1965 (pp.462-474) に掲載している。この論文は邦訳『ケアの本質』では「付録Ⅰ ケアすること」として訳出されている。ただし、71年の著作と65年の論文の訳者は異なっているようであり、訳語は不統一である。簡単にいえば、前者は意識で後者は直訳である。いずれも一長一短がある。すなわち、前者が後者のような直訳口調だったならば、読者に与える感動は弱いものだっただろうが、学術的研究にとっては直訳の方が扱いやすい。

それゆえ、訳語の統一を考えれば、すべて私が訳す方がよいのであるが、ここでは、読者の参照の便も考慮して、できるだけ邦訳を用いていくことにする。

65 年の論文はつぎの文章で始まる。

ケアすることは、知識を得ることと同様に、本質的に興味深い人間活動のひとつである。またケアを理解することは、知識を得ることと同じく、人間理解の中心となるものである。しかしながら知識を得ることとはちがい、ケアについては哲学的考察がくわえられてきたことはほとんどなかった。(邦訳 p.183, 原著 p.462)

ここでメイヤロフは、ケアを哲学的に考察することが過去にほとんどなかったと述べている。彼は自らのケアの理論の独創性を自覚している。本稿で追究している問題は、先にも述べたように、いかにして彼がこのような考察へ至ったかということである。フロムの『愛するということ』でも、愛については深い考察がされるが、ケアについては、愛の構成要素とされるにとどまっている。

71 年の著作と異なり 65 年の論文は、学術論文の体裁をとっており、脚注がつけられている。その他の論文でも同様であるが、メイヤロフは論文の注においては、自説と他の説の違いを強調する傾向がある。これは、一般に、主張の独創性を強調する場合に見られる傾向である。

65 年の論文の脚注の中で、上に引用した最後の文章に付されたものは、重要であると思われる。それを引用してみる。

ハイデッガーは『存在と時間』の中で、ケアを人間に特有の存在様式であると述べてはいるが、この論文中のケアについての考え方は、ハイデッガーの分析に負うところはほとんどない。さらに、私の目的はケアのパターンを詳しく考察していくことであって、人間の本質は何かということを確立するものでもない。この論文中の考え方は、非常に異なった形ではあるが、デューイ、マルセル、フロム、バックラー、ブーバーの諸著作に影響を受けている。(邦訳 p.213, 原著 p.462)

ハイデッガーが『存在と時間』で人間に特有の存在様式としたのは、**Sorge** である。邦訳ではふつう「関心」、「気遣い」、「憂慮」などと訳されるが、英語では **concern** あるいは **care** などと訳される。ここで、メイヤロフは **care** という訳を用いている。ハイデッガーにおいては、自己自身の存在を問題とすることへと巻きこまれているという、人間存在に特有の様式である **Sorge** と、看護、介護、子育て、教育などで具体的・個別的行為として現れる配慮やケアは区別される。前者は、そもそも何かが存在するということそのものにかかわる次元、いわゆる存在論的次元にある。それに対して後者は、あれこれの具体的存在者や具体的行為にかかわる存在的次元にあるとされる¹。メイヤロフ

が上記の注で述べているのは、65 年論文において考察するのは存在論的次元にあるケアのパターンであって、人間の本質や存在論的次元にかかわるケアではないということである。

その考察の仕方は、ケアという活動を、何らかの理論や基礎づけにもとづいて把握するのではなく、その活動に即して記述することである。フロムのような心理学的方法もここではとらない。ケアという活動に即して、その本質をなすパターンを記述するのである。メイヤロフはそれを「ケアの現象学」と呼ぶ（邦訳 p.184, 原著 p.462）。すなわち、65 年論文はケアという現象を記述する現象学のスタイルをとっているが、ケアが人間存在にとってもつ根本的な意味、いわば存在論的次元でのケアについては触れないようにしている。この論文は、ケアについての現象学的記述を試み、従来注目されてこなかったケアを哲学的視点で捉えるという独創的なものであるが、まだケアと生の深いかわりについては、最後に触れるにとどまっている。

その論文の内容について詳述することは本稿の主たる目的ではないので、目次だけを挙げてみよう。

まず、「ケアの現象学」の項目があり、それに以下の項目が続く。1.「差異の中の同一性」、2.「他者の価値の感得(experience)」、3.「他者の成長をたすけること」、4.「関与と受容性」、5.「専心」、6.「相手の不変性」、7.「ケアにおける自己実現」、8.「忍耐」、9.「結果に対する過程の重要性」、10.「信頼」、11.「謙遜」、12.「希望」、13.「勇気」、14.「責任における自由」、15.「広義の意味のケア」。

メイヤロフのケアの理論では、ケアの対象は人間にかぎらない。芸術作品や構想(idea)、そして共同体(communitiy)もケアの対象となりうる。これは看護や介護、子育て、教育の場面でケアを捉える人にとって奇異に思えるかもしれない。そこでは、ケアの対象は人間にほかならないからである。しかし、メイヤロフが目指すのは、「他者が成長するのを援助すること」としてのケアの記述であり、そのかぎりでは、人間へのケアも哲学的構想へのケアも同じパターンを有するとされる。その同じパターンの記述がケアの現象学にほかならない。それは、「知ること」の対象が数学の定理、科学的事実、歴史的事実、解釈、学説、道徳原理、神話など多くの種類にわたるのと同様である。そして、メイヤロフによれば、ケアは他者の成長を助けると同時に、本来の自己や自由の実現にも寄与するものであった。

以上のように、メイヤロフが 65 年論文で取り組んだのは、人間以外にも含む広義の他者の成長の援助としてのケアの現象学的記述であった。

（2）71 年の著作 *On Caring*—ケアの存在論

65 年にケアの論文が書かれてから 6 年後の 71 年に著作が刊行される。元同僚の言うように、その間メイヤロフは概念や表現の彫琢に努めたと思われる。それはたんに修辭的な事柄ではなかったと思われる。65 年の論文と 71 年の著作を比較すると、著作にお

いて新たな項目が付加されたことがわかる。新たな項目のほとんどは、65 年論文中的「15.広義の意味のケア」を詳述するものである。71 年の著作の 4 割ほどの分量は、65 年論文の「広義の意味のケア」の展開である。そして、その付加は、65 年論文につけられた前掲の注「私の目的はケアのパターンを詳しく考察していくことであって、人間の本質は何かということを確認するものでもない」と明らかに異なる内容を示している。それは、71 年の著作の序において次のように述べられていることから伺い知ることができる。

この小著は、互いに関連する二つの主題をあつかっている。一つは、ケアすることを一般的に記述することであり、もう一つは、ケアすることがどのようにして全人格的な意義を持つか、その人の人生にどのような秩序づけを行うかを説明することである(a generalized description of caring and an account of how caring can give comprehensive meaning and order to one's life)。(邦訳 p.16,原著 p.3)

一般の読者を対象とするシリーズ(World Perspective Series)の性格上、ここでは「現象学」という語を避けている。できるだけ哲学上の用語や使わず脚注も最小限にとどめ、しかも事柄の本質に迫るという執筆方針がここにも現われている。ただし、言葉こそ挙げないが、一つ目の主題はケアの現象学にほかならず、先の論文が目指したところである。そして、二つ目は 65 年論文ではごく簡潔にしか言及されておらず、著作で新たに付け加わったものである。この付加された部分は、よき生とは何か、人生の意味とは何かということにかかわるものであり、先の論文では触れなかった「人間の本質は何か」にかかわっているといえるだろう。

メイヤロフのケアの理論では、ある対象が本質的価値をもつことを経験する(experience)、あるいは感じる(feel)、また、その対象の成長を助けることを求められていることを経験する、感じるということが、ケアの活動の基盤にある。こうした経験や感情は、自分の意志で作ridすものではなく、ハイデガー流に言えば、自己自身を問うことへと巻きこまれている様式の一つである。ケアを一例として、多様な諸活動へと巻きこまれる仕方を統一するところの巻きこまれていること自体は、上述のように、存在すること自体を問う存在論的次元に属する。そして、具体的なケアではなく、ケアへと巻きこまれていることも、存在論的次元にあるといえる²。

先にも述べたように、自己自身の存在を問うことへと巻きこまれていることとしての *Sorge*, *care* と、いわゆるケアの活動としての *care* は次元が異なる。これは重要な区別である。しかし、次元が異なるとはいえ、同じ言葉'care'が用いられていることに注意すべきだろう。65 年論文の脚注でわざわざハイデガーの *care* 概念に言及していることから、メイヤロフがケア概念に思い至ったことにハイデガーの用いた概念が影響しているのは確かだろう。メイヤロフにとって、ケア概念は、フロムのように具体的な行為

にかかわるだけでなく、人間の本性とも深くかかわるものであった。

65 年の時点では、ケア概念が人間の本质と深くかかわることは明示されず、単にケアの現象の記述がなされていた。しかし、人間本来のあり方、人の生の意味を問う 71 年の著作では、それが明確に述べられ、ケアの理論は意識や活動の現象の記述という次元を超えることになる。

たとえば、「了解性(intelligibility)」について次のように述べられている。

「了解性とは、私の生活に関連しているものは何か、私が何のために生きているのか、いったい私は何者なのか、何をしようとしているのか、これらを抽象的なたちではなく、毎日の実生活の中で理解していくことなのである。(中略) 私の言いたい了解性は、私たちが何かあるものに帰属しており、かつ、何物かから、あるいは誰かから自分たちが特別に必要とされているという感じをともなっているものである。(中略) 了解性が、この世界の中で心を安んじている状態(being at home)を示すという意味において、私たちは物事を支配したり、説明したり、評価したりすることによってではなく、まさにケアすることとケアされることをとおして、はじめて究極的に心を安んじる(at home)ことができるのである。こうした了解性は、人生における驚きを減らしたり、無くしたりはしない。それどころか、了解性は、私を自分自身や世界に対し開いてくれるものであるから、驚きに敏感になる。(中略) むしろ私は、存在の持つ神秘そのものについて言っているものであり、そもそも森羅万象がここに存在しているという壮大な神秘、驚異について言っているのである。」(邦訳 pp.154-158,原著 pp.91-93)

ここでは、存在すること自体の神秘が述べられている。たんなる現象の記述ではなく、現象を現象として成り立たせる次元に言及が及んでいるといえる。すなわち、具体的なケアの活動の次元を超えた次元、ケアの存在論とでもいえる次元が開かれているのである。他者の成長を助ける行為や活動は、現象の次元を超えてその奥にある人間本性へとわれわれを導いていく。そのような洞察を表現するのに、ケアという言葉がふさわしいとメイヤロフは考えたのだろう。こう考えると、ケアという概念が、具体的活動の次元とともに、その奥にある人間本性、人間存在の次元にもかかわること、そのことを彼は care とも訳されるハイデガーの Sorge 概念から学んだという推測は、あながち的外れとはいえないだろう。

もう少し立ち入って、ケアの存在論とでも言える立場について考察してみよう。71 年の著作には、その 6 年前の論文や他に私の参照した彼の学術論文と異なり、脚注がほとんどない。あるのは 2 つだけである。その両方とも、著作を読むために必須のものだから付けられたと考えられる。

一つは、キーワード中のキーワードである「ケア」についてのものであり、著作の初めの方に置かれている。

ケアという言葉を一般的に使えるようにするために、人をケアすることだけに用いていることが明らかであるとき以外は、それ(it)をケアすると書くことにする。」(邦訳 p.19, 原著 p.7)

もう一つは、後半部分のキーワード「場の中にいる」についてのものである。

”場の中にいる(In-place)”とは、術語として用いられており、以下に述べることに重要な役割をになう。この語は、術語ではない普通の用語(In place)と明確に区別できるように、ハイフンを用いて使用することにする。」(邦訳 p.116, 原著 p.68。ただし、原文では、二つ目の In place の挿入はなく、一つ目の挿入もハイフンを用いていない。)

私は、これら二つの脚注はメイヤロフのケアの理論を理解するうえで重要であると考ええる。というのは、まず、一つ目の注で述べられたこと、そして本稿でも指摘してきたこと、すなわち彼のケアの理論は人間以外の存在も対象にすることについてである。それは、ケアという行為や活動がたんにある具体的な種類の行為・活動でないことを語っている。

つまり、ケアとは看護、介護、子育て、教育などの活動に限定されず、われわれが生きていること自体にかかわりうるものがそこには示されている。人間、理想、観念、社会など、何かが成長することへの手助けに心を奪われ、専心し、それを完成させるべく、対象に共感しつつ距離をとりながらも、その対象の成長と自己自身の実現が区別しがたいような関係を築きつつ、さまざまな障害を乗り越え、対象を深く知ることと心身の精進を重ねながらそれを追求すること、そして次々に展開する追求過程自体を重視する生き方、それがメイヤロフにとってケアするという生き方にほかならない。

「ケアにたずさわると、その周辺の活動および価値がおのずと序列化されてくる。ケアが第一義的なものとなり、他の活動や価値は第二義的なものとなる」(邦訳 p.110, 原著 p.65)とあるように、何らかの対象へのケアはその過程の展開を通じて、価値の序列化をもたらす。それはあるものへのケアを中心として、生活の全体を統合することへと至る。こうしたことは「包括的ケア(comprehensive care)」と呼ばれる。そして、このような状況にあるとき、人は「場の中にいる」ことになる。これは、たんにある場所にいることではない。他者の要求に応答することを生の第一義的事項とすることで、他者そして世界とつながることであり、また、場の中にいることは、確定したことなく、たえず更新していくものでもある。

3. 場の中にいることと自由の理論

「場の中にいる」ことは、メイヤロフのケアの理論、とくにケアの現象学ではなく存在論において、中心的位置を占めている。これについてもう少し考察してみる。

「場の中にいる」とはいかなることであるか。彼の叙述において目につくのは、否定的

表現の多いことである。それはこの概念が誤解されやすいこと、理解しがたいことを示している。否定的表現を通じて、本来の意味が示唆されるのである。たとえば、以下のようになれる。

それは、自分に合わない場から逃れて、無関心、無感覚となっている場の外にいることと対照的である。また、前もって、ある場が用意されているわけでもないし、コインが箱の中にあるような仕方で、ある場にいるのでもない。また、一度逃れたところへあきらめて戻っているようなことでもない。「ある根本的に新しいことが、私たちの生活の中に起こるのである。これはあたかも、ある人が自らの生に対して全面的責任を負うと決心したとき、その人の生に変化が見られるのに似ている。」（邦訳 p.116,原著 pp.68-69）

場の中にいる感じ(feeling)はまったく主観的というのではなく、たんなる感じでもない。場は私が所有するものでもない。たった一度確立されればそれでよいというものでもない。物でも固定した状態でもなく実体化できない。地理上の場所でもない。また、場の中にいることは、社会的に認められることでもない。社会的に認められることで、かえって場の中にいることができなくなる場合もある。それは芸術家についてもいえるし、企業に勤める人についてもいえるだろう。

また、場の中にいることを可能にするほどケアが包括になるためには、ケアは私に特有の能力に根ざしており、私は自分の才能を十分に活用しなければならないし、自分自身をケアしなければならない。

また、場の中にいるとは、自己実現へ至る自己のケアの対象として不可欠である補充関係にある対象(appropriate others)へのケアを中心にして、生が秩序づけられていることである（邦訳 p.126 原著 p.73）。補充関係にある対象の例として、メイヤロフは、短期的観点からは、ある人が書いている本を、長期的観点からは、その人の著作すべてに表現されている考えや理想を挙げる。人は、そうした補充関係にある他者を見出し成長を助けることにより、いわば自分が選ばれてある状態になることに自ら手を貸すのである（邦訳 p.136 原著 p.78）。

このような補充関係にある対象をもち、場の中にいる時、人は自律するとメイヤロフはいう。「自律(Autonomy)ということは、私が自己の生の意味を生きることである、と言い換えられる（邦訳 p.161,原著 p.94）」。また、「“自分自身の生”を生きるためには、私はケアすることと自分の生に対し責任を持つこととをとおして、私の生を自分自身のものとしなければならない（邦訳 p.162 原著 p.95）」。そして次のようにいう。

自律といっても、これは他のものから離れていることを意味したり、強い結びつきのない状態を指したりするのではない。かりに自律が離れていることを意味するならば、他者と共存したり、強い結びつきを持つということは、必然的に私をがんじがらめにし、私をとりこにすることを意味することになる。さて一方、自律とは自己の殻に閉じこもり、“小鳥のように自由に”

ふるまうことでもない。それどころか、私は他者に専心しているがゆえに、また他者と依存関係にあるがゆえに、自律的であり得るといえるのである。この場合の依存とは、私と相手の双方とも自由にしてくれる種類のものにほかならない。(中略) 自分と補充関係にある対象の成長を援助する中で、自分自身もまた成長していくからこそ、私は自律的であり得るのである。私自身に起こる自己実現が、他者に起こる自己実現と切り離されていると考えるならば、自律は私自身に実現されていないのである(邦訳 p.163-164 原著, p.95-96)。

ここに述べられる「自由」は、束縛のない状態としての自由や、理性による自己支配としての自由でもない。自己の生や自己実現にとって不可欠である対象に専心して、その成長、自己実現を助けること、いわばそうした対象に専心し心を奪われる状態は、自分自身の生を生きている状態であり、そこに自由があるとされる。それは他者を本格的にケアすることとしての自由である。

フロムの『自由からの逃走』(1941)によれば、近代人は、中世社会の封建的拘束から解放され、自由を獲得したはずだが、今度は孤独感や無力感にさらされることになった。その結果、これに耐えきれず彼らは「自由からの逃走」を開始した。自由ゆえの孤独に直面した人間に残された道は、サド・マゾ的傾向をもち独裁者に屈服する一方でユダヤ人を虐待するか、愛や生産的な仕事の自発性のなかで外界と結ばれるしかないとされる。孤立を招来するのではなく、他者へのケアの中に自由の実現を見るメイヤロフの自由論は、そのことを念頭に置いているといえる。ただし、その自由論は、束縛からの解放に伴って生じた孤独感や無力感を埋めるものではなく、ケアする対象への依存関係自体を自由の条件とするものであった。

4. 63 年の論文“Sartre on Man’s Incompleteness”ーサルトル批判

このように自己と他者、世界、自由を捉える彼の立場の背景をなすものとして、彼のサルトル批判を見てみよう。65 年論文の注にもサルトルへの短い批判があるが、その批判は彼の 63 年の論文(“Sartre on Man’s Incompleteness: A Critique and Counter-Proposal”, *International Philosophical Quarterly*, 3(4), pp.600-609, 1963)で展開したことにもとづいている。

63 年の論文では、自己を「対自存在(Being-for-itself, être-pour-soi)」とするサルトルの存在論が批判される。サルトルは存在を即自存在(Being-in-itself, être-en-soi)と対自存在の二つに大きく分ける。大雑把には即自存在とは自力で動けない対象や物の世界である。それは自己充足し完全である。それに対して対自存在は人間の意識の世界に対応し、不完全で、自足せず、つねに自己充足を求める存在である。対自存在は即自存在の否定であり、存在の欠如を表しており、即自存在における空虚である。対自存在はそれが存在し続けるために即自存在を必要としており、即自存在なしに考えることもできない。対自存在が求める究極の完全性は永遠に達成不可能であり、人間は自己自身であ

る無から逃れるという不可能な課題を負わされている。サルトルによれば、こうした不可能な課題とはいわば神になる欲望である。

サルトルに対するメイヤロフの批判として二点考えることができる。ひとつは他者の特徴づけに関するものであり、もう一つは現在をどう捉えるかに関わっている。

第一点についていえば、サルトルにとって他者(others)とはつねに自己の自由を妨げる存在であり敵(enemy)であるとしてメイヤロフは批判する。サルトルによれば、他者とは、私を彼の関心の軌道に引き込み、私を即自存在の状態で帰そうとする存在である。また、私にとって他者は、私と同様の対自存在としてではなく、観想の対象などでもなく、操作し利用されるべき対象としてのみ知られる。そこにあるのはつねに、いずれが主導権を握り他を操作することで他を自己充足の糧にするかという戦いである。

メイヤロフにとって、本来あるべき自己と他者の関係は、それとはまったく異なり、ケアするものとされるものの関係である。さらには、ケアするものどうしの関係である。ケアする過程は自己実現の過程でもあるのだから、ケアされる他者は、敵であるとするサルトルの説とは異なり、自己の充足にとって不可欠の存在である。メイヤロフはそのような他者を「私と補充関係にある他者」、あるいは「自己充足させる(fulfilling)」他者(前掲書邦訳 p.124,原著 p.72。一部、訳を変えてある。)と呼ぶ。補充関係にある他者は拡張した自己であると感じられ、逆に、自己はある意味ではそうした他者の一員とさえ考えられる。そのような他者は、自己実現をもたらす存在であり、私の自由を実現する他者である。また、こうした生き方をする者には、同じような生き方をする者への関心も生じてくることになる。

メイヤロフのサルトル批判の二点目は、逃れるべきものとして現在を捉える点に向けられる。メイヤロフはいう。サルトルにとって現在とは逃れ去るべきものである。対自存在は過去である存在から逃れ、未来である存在へと探究の目を向け続ける。われわれは荷車とつながる棒に付けられた人參にありつこうと、荷車を引き続けるロバのごとくである。ニンジン求めていくらロバが進んでも、ニンジンにはロバに近づかない。同様に、われわれは自分自身にたどり着こうと走るが、いくら進んでも自分自身と再統合されることはない。このように人は神になろうという不可能な行為に専念しているのであり、その目的のために人々、物、そして現在を使用している。こうした実存の仕方は、対自存在というその存在構造にもとづいている。

このように、不完全な現在の先にあるべき完全な自己を探究する試みは、現在をつねに不完全と規定し、現在から意味を奪うことになる。それに対して、メイヤロフは、現在を、哲学的探究や観想に典型的に見られるように、自己実現へ向けて深まりゆくそれ自身重要な過程と捉えるとき、現在は欠如を経験しつつも充足したものとなるという。そして、哲学的反省や観想が示すように、現在の活動は自己実現のための活動として位置づけられるのではなく、その活動自体が自己実現の過程である。いいかえれば、自己実現とはそうした自己実現の積み重なった過程に他ならないのである。それは、哲学を

探究することが即ち哲学の活動であるのと同様である。そうした活動は過去から多くを学び、現在をつねにより充実したものにしていく。このような過程の重視は、メイヤロフが重きを置いた点であり、65年論文、71年の著作のいずれにおいても一つの独立した項目でもって述べられている。

このように、63年の論文では、2年後のケアについての論文に結実するような記述が随所に見られる。また、対象の成長を助けることとしてのケアの萌芽と思われる箇所がある。以下に引用してみる。

観念がわれわれに自分を顕すようにさせること、観念にそうした機会を与えることで、われわれはそれら素材に対する尊重を示すし、逆に、そうした観念が興味深いものであることを見出すことでわれわれは報われる。そのような尊重は、観念をたんなる操作の対象としてでない仕方理解することを含む。観念がなるようにまかせることで、われわれは必然的に観念に対して自らを開き、それによって観念がわれわれに顕れることを可能にする。観念は練り上げられることによって豊かに成長し、われわれは理解することによって生の深みにまで成長する。(p.607)

ここでは哲学的思索における対象である観念について述べられているが、メイヤロフはこれを一般化して、自己と他者の関係に敷衍しようとしている。そして、観念の成長を他者の成長へと一般化するとき、われわれと他者の関係として、サルトルとは全く異なる関係が現われてくる。それは、自己と他者を敵対するものとみなすのではなく、他者の成長を助けることにおいて、自他ともに成長するような関係である。そして、「成長を助ける」ということにふさわしい概念の一つは「ケア」である。このように考えると、これも、メイヤロフがケア概念に至った経緯の一つと考えることができる。

以上で述べたことから、メイヤロフは哲学的思索や観想を典型として、生のあり方を考察していたといえる。このことをさらに裏づける資料として、サルトル批判と同じ63年に書かれた論文“A Neglected Aspect of Experience in Dewey’s Philosophy”, *The Journal of Philosophy*, 60(6), 1963を挙げるができる。

そこでは、「経験の静的次元(quiet dimension of experience)」にデューイがほとんど注目しなかったとして批判する。経験の静的次元とは、観想的(contemplative)、あるいは鑑賞的(appreciative)次元と同様の意味をもつが、それらよりも一般的であるので、「静的」という言葉を用いるとメイヤロフはいう。

メイヤロフによれば、デューイは人間を、問題解決をする動物(problem-solving animal)と規定するが、経験の静的次元とは、デューイの経験概念の特徴である目的、操作、共有、実用的、社会的、公的といった特徴をもたない経験である。メイヤロフの挙げる例では、まず、疲れて帰宅し、座って落ち着いてから、今日はどんな日だったのかとか、自分の人生との関係について思いをめぐらす。これは自分自身や自分の生の源泉と触れるひと時であり、デューイが挙げるような、日常の中で問題を解決し納得して

いく経験や他と識別された経験とは異なる。統御や操作ではなく、人生が自らを顕すがままにさせるような受動的感受性を含むような経験である。この日は二度と戻らないという自覚を伴う経験であり、「結果などどうでも構わない」という含意をもつ経験でもある。雨音を聴く経験も例として挙げられる。ここでもデューイが関心をもった経験と異なり、他の雨音との相違や、いつどこで聴いたのかといったことは関係がない。その経験は過去と現在の差がなくなるような経験であり、子供のころに聴いた雨音と変わりがないと思えるかもしれない。

プライバシーは人間存在の核にあるが、メイヤロフはこうした経験がプライバシーと深くかかわるという。プライバシーは個人の尊厳の核にあり、人をめぐる不可侵な境界をなしている。他者と何かを共有するという場合でも、他者と自分のプライバシーへの感受性を前提するのである。そして、このことを理解しないと他者を操作し、他者を人格としてでなく物とみなすことへ至ることになる³。

このように、他者の尊重の核にあるのは静的経験であり、観想的経験はそれに含まれる。メイヤロフは哲学的思索や観想の経験を、われわれの生の根本にあるものと捉えていたといえる。

5. おわりに

以上の考察から、メイヤロフがケア概念に至った経緯についての問いに、ある程度は答えられたと思われる。

それは、ひとつにはフロムの「愛」の概念である。愛についてはフロム以外にも数えきれないほど多くの人が論じているだろうが、フロムは愛とケアを分かちがたく論じている。しかも、愛を他者の成長を助けることとする。これは、メイヤロフのケアの定義を直ちに想起させるものである。それゆえ、彼のケアの理論はフロムの愛の概念を踏まえて提示されているといつてよいだろう。

ただし、愛と異なりケアは、普通は、個別的な行為とされる。そうした次元を超えて、ケアを人間本性や人間存在についての理論とするのに、ハイデガーの影響が大きかったと思われる。おそらく、ハイデガーの基本概念である *Sorge* が *care* と訳されることに彼は注目したと思われる。ケアは個別の行為にかかわる存在的次元だけでなく、人間の本性或存在そのものにもかかわる次元という両義性をもつ。このことは、愛をケアで置き換えることを正当化したものと思われる。ケアは個別的・具体的な行為の次元にとどまらず、人間の生の本来の在り方に関わることとなる。

メイヤロフのケアの理論の形成には、以上の二つがいわば大枠をなしている。そうした枠組みに実質を与える思想としては、ケアする側とされる側が二つでありつつ一つでもあるあり方、ケアの対象の自己実現とケアする側での自己実現との同時並行性、それを支えるものとしての、ケアへと巻き込まれる経験、そこから導かれる、自他がともに生かされる生を組み上げていくあり方、自律と自由の理論、また、現在を目的に至るた

んなる過程としてでなく、それ自身で充実したときと捉える視点、そして、存在の神秘への驚きの感受性の高まりと同時に進行する自己の安定、などを挙げることができる。

これらの思想は根拠なしに提示されているわけではない。そこでその背景をさらに探ると、そこに見出されるのは、哲学的観想という生のあり方である。以上に挙げた彼の思想の内実については、ケア中心の生についてのものという主張に違和感をもつことがあるかもしれないが、観想的生についてのものであると考えれば納得できるだろう。

メイヤロフがケアの対象を人に限定せず、芸術家にとっての理想や哲学者にとっての概念もケアの対象に含めているのは、けっして偶然のことではない。彼にとって、哲学的観想は本来の生の原型といえるものであった。概念と取り組んでいる哲学者は、思考する対象である概念について考えているが、それだけではない。彼は思考することで、概念の成長を助けている。概念は思考者の中にあるというよりも、むしろ、外からやってきて成長を求める存在である。哲学者は概念を自己の内より紡ぎ出しているわけではない。概念はふとしたきっかけで舞い降りてきて成長を求める。そして、概念の成長過程は、思考する者自身の自己実現の過程でもある。おそらくこの発見が、ケアと哲学的観想を結びつけるものだったと思われる。この発見により、ケアを中心とする生は、観想的生をモデルとして再構築されることが可能となった。

以上が、本稿の冒頭に掲げた問いへの回答である。不十分ではあるが、ある程度は答えることができたと思われる。

本稿の考察はこれで終わりにしたいが、ひとつだけ触れておきたい点がある。

サルトルが他者を敵と規定したことをメイヤロフは批判する。しかし、現実になれが会う他者には、そのように規定できる要素があることも疑いようのない事実である。人間の間での争い、嫉妬、怒り、悪意、また他人には理解できない心の奥、これらを見捨て人間関係を考えることは難しい。医療の現場でも、行儀のよい患者ばかりではない。ケアを求める人が、ケアする人を支配しようとする場合もある。たとえば、親からケアされる子供も、何とか親を支配しようとする。モンスターペイシエントが出現することもある。看護師、介護士、保育士、教師などケアを専門とする職業では、ケアの相手を選ぶことが困難である。それに対しては、長期的にはケアの理想を追い求めつつ、短期的には個々の人に全力で対処するしかない、とメイヤロフはいうだろう。

しかし、この辺りは、自分が虜になった理想や対象を生涯かけて追いかける芸術家や哲学者、研究者とは違っている。哲学者や芸術家とその概念や理想の関係をモデルとすることで、敵としての他者という問題や、人間どうしの軋轢、そして他者が他者として尊重される根拠を覆い隠すことになるという批判も可能である。哲学者にとっての概念は、思うようにならない面を持つにしても、自己と一体化したような存在であるが、実際の生活の場で会う他者は、どうしても理解できない面をもつ。いわゆる他者性を有している。たとえば、ケアによって患者に寄り添っても、患者は患者、自分は自分なのであり、患者についてもっとも重要なことは患者に任せるしかない。それが患者の自律

尊重の基盤ともなっている。公的な世界と離れた私的な経験を、メイヤロフは「静的経験」と呼んで重視するが、ケアへの専心は、他者によるいかなる規定からも離れた領域に足を踏み入れることにもなりかねないと思われる。

注

1. H.L.ドレイファスのハイデガー解釈である『世界内存在』（門脇俊介監訳、産業図書 2000 年）には、気遣い(Sorge, care)について次のようにある。

「こうしてハイデガーは、気遣いを心配として、あるいはもっと単純に実際的な配慮といったものとして理解されることを防ごうとしている—これらは Sorge という語に含まれる意味であるが、それというのも、Sorge は “the cares of the world” [心配事] といった用法での英語の care にあたるドイツ語だからである。私はハイデガーと対談したときに、英語の “care” という言葉は愛とか気を遣うといった含みを持つということを指摘した。それに対して彼は、それはちょうどよいと答え、というのも自分は「気遣い」という言葉によって、“Sein geht mich an” —英語でのおおよその意味は、存在が私にかかわってくる[being gets to me.]—という非常に一般的な事実を名指したかったからだと述べた。つまり、気遣うことに含まれるいかなる存在的意味も、存在論的な気遣うことの様態として総括されるべきものだということになる。」(p.274)

2. 巻き込まれていることを、メイヤロフは「方向性をもつ」と表現している。そして、それは独裁者への猛獣も含むことから、それだけでは本来の生を生きていることにはならないとする。(以下の引用中の原語の挿入は筆者による。)

「私たちの人生の中で “方向性を持っている(having direction)” というとき、これはおよそ次のようなことを指している。すなわちその方向性とは、感動してそれに働きかけたくなるほどに私たちの気持ちをひきつける何か（目的、目標、興味、人物、理想）であり、そしてそれは十分に包括的であることから、それに焦点を当てることは、とりもなおさず私たちの諸活動を調整し、自分たちの人生に連続性の手段を与えてくれるのである。」(邦訳 p.136, 原著 78)。

3. メイヤロフはここでそうした経験が日本の詩に表されているといい、紀貫之、柿本人麻呂、了然の歌ないし偈を挙げている。ただし、その訳は別の著作からの孫引きであり、しかもかなり意識らしく、人麻呂の歌以外は該当するものが見当たらない。その人麻呂の歌は、亡き妻を葬った後のものである。「家に来てわが屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕」。